『ヨコハマ伊勢佐木町 復活への道』

(山田泰造、日本経済新聞出版社、09年)を読む

このところ横浜、商店街やまちづくりに関心があり、標記タイトルの本を一気に読み進んだ。本の帯の案内から紹介していこう。

「戦前戦後、"銀座をしのぐ"と称された繁華街、横浜市中区の伊勢佐木町商店街。かつての栄光を取り戻すべく、この街に集まった若者たちが再生プロジェクトをスタートさせた。復活のキーとなるのは音楽なのか、映画なのか、それとも---。開港150周年を迎えたヨコハマで、愛する街の再興に賭ける若者たちの活動を清々しく描くドキュメンタリー。 若者たちの『まちおこしプロジェクト』は成功するのか?」

いまや全国的に「街」が疲弊しつつあるが、観光都市ヨコハマでも同様である。新興のみなとみらい21を始め、元町・中華街、港の見える丘公園、山下公園など幾多の名所や観光スポットが存在する一方で、すでに往年の活力を失っている街も垣間見える。その最たるエリアが「伊勢佐木町」である。横浜駅西口が商業地として開発され、みなとみらい地区が整備されると、1日に20数万人の来街者があり、銀座をしのぐと言われ全国有数の繁華街・商店街であった伊勢佐木町は相対的に衰退を余儀なくされることになる。

ここから老舗商店街を甦らせる若者たちの「まちおこしプロジェクト」が始まる。紆余曲折を経ながら、商店街が復活を遂げていくプロセスがじつに興味深い。本書は全国共通の課題となっている"街の再生・甦り"について、ヨコハマ伊勢佐木町をケーススタディとして取り上げ、「復活への道のり」をヒューマンタッチのノンフィクションドキュメンタリーで追跡している。まちづくりは人づくりであることを想起させる。

昭和40年代にいまは亡き青江三奈が歌った「伊勢佐木町ブルース」が大ヒットした。デュオ「ゆず」は伊勢佐木町の松坂屋前で路上ライブを重ね、そこからメジャーデビューを果たした。こうした伝統を受け継いで、「まちおこしプロジェクト」の若手集団は音楽イベントを活性化の手段として定着させようとする。街の活性化にとって、インパクトや活気、宣伝効果、出資費用など、これらすべてを考慮すると、やはりイベントが最適である、と本書の筆者は考える。ただ忘れてはならないのは、継続的かつ波及効果をもたらす街の活性化へと繋げるために、イベントを一過性のもので終わらせないようにする工夫である。

(2009年8月25日　記)